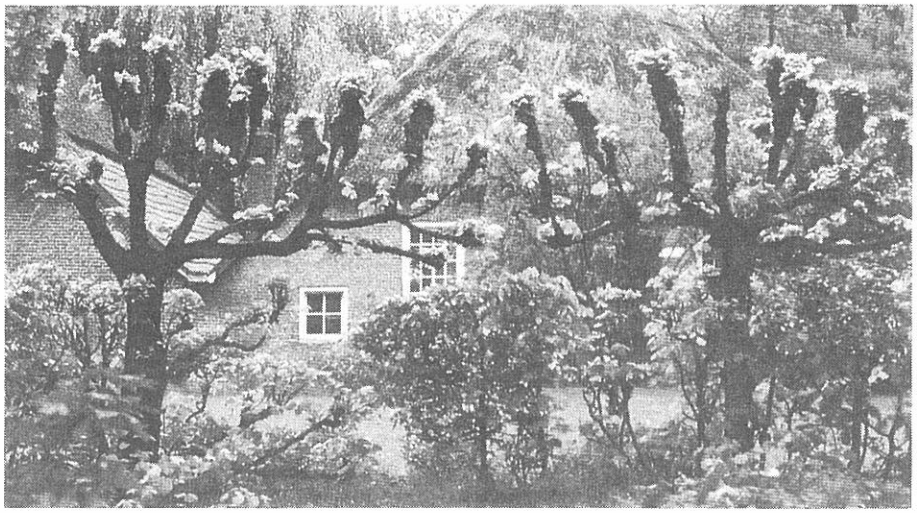
2．特殊な樹木の仕立て

出所：THE PRUNING BOOK by LEE REICH,p.194～197,212～219, 1997
The Taunton Press

1）ポラーディング仕立て（Pollarding）



ポラーディング仕立て（角を落とした鹿の意、密に枝を出させるために坊主に刈った形）には好き嫌いがある。ポラーディング仕立ては冬期には自然な形に見えないし、主幹ないし短い骨格を形成する大枝の先端は夏期にこん棒状の頭部を呈する。見事な新梢の茂りが野性的に先端を一杯にする。ポラーディング仕立ては樹木にフォーマルな外観を添える手法として有効であるし（１箇所もしくは数カ所から生ずる新梢を十分に蓄えていること）、さもなければ大高木の大きさをコントロールするのにも有効である。

ポラーディング仕立ては他から孤立した、しかし別種のアピールを備えていると思われる。人々はポラード樹木をデラウェアの田園にある家屋の前にポツンと立っているのと同様に、サンフランシスコやヨーロッパの諸都市の街路にも見いだす。このテクニックは、樹木を枯死させることなしに薪を採取する方法として、数世紀前のヨーロッパにおいて必要にせまられて生み出されたものであった。薪炭林など定期的に樹木を地際から切り倒すことは、樹木がそのような取扱いに耐え、薪を採取できるようにもなるが、しかし地際で生育する新芽は草食動物に捕食されてしまった。

繰り返し伐採することを気にせずにすむ生長の早い落葉樹は、ポラーディング仕立てにふさわしい候補樹木である。そのような樹木とは、シンジュ、ニセアカシア、キササゲ、アメリカグリ、セイヨウトチノキ、シナノキ類、モミジバスズカケ、キリ、アメリカスズカケ、ヤナギ類である。

少なくとも1.5ないし1.8㍍のはっきりした幹を有する高さに頭部を作るのでなければ、若木をポラード仕立てにする必要はない。この高い頭部は唯一見た目を

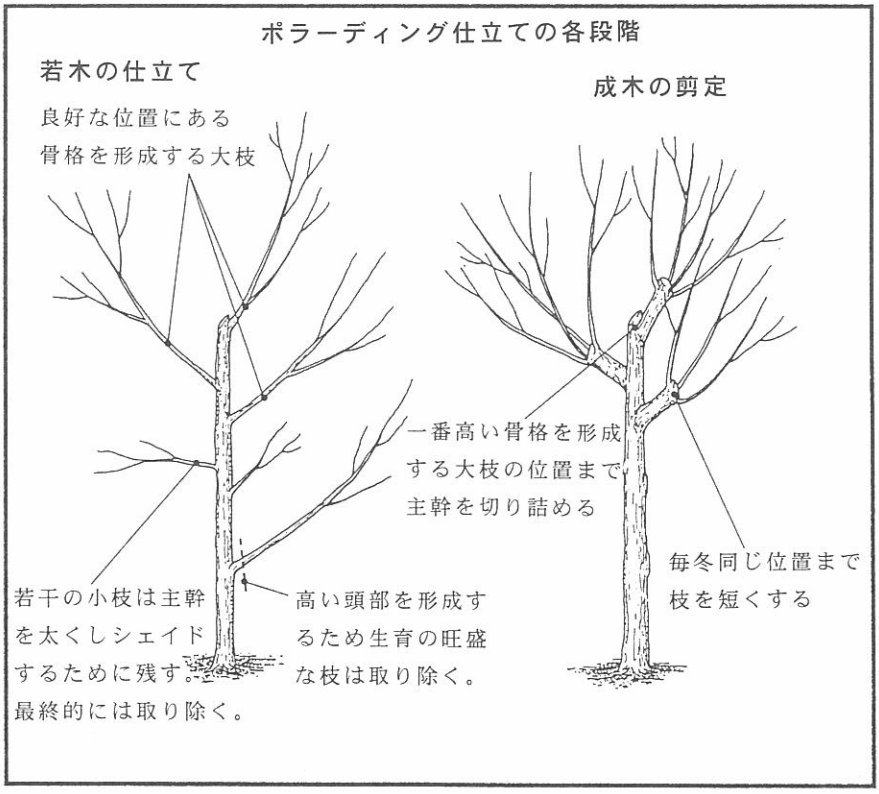
目的とする。樹木が若い期間は、幹に数本の枝を残すことにより、幹を太くすることと直射日光から保護する。しかしこれらの枝をシーズン中に30㌢以上は生長しないように切り戻しておき、それらは２～３年後に完全に取り去る。かなりこん棒状の頭部を有する幹になった樹木に対しては、冬期に頭部を望みの高さになるよう幹を切り戻す。

もしポラード仕立て樹木が幹にずんぐりした骨格の大枝を形成するようになったら、これらの大枝が螺旋状に幹の周りに沿うように、樹木の垂直方向に15～45㌢の間隔を空けて枝を広い角度で放射状にする。そして再度見た目よく樹木をデザインする。決して樹高が極端な高さに達したり、大枝が長く太くならないようにする。

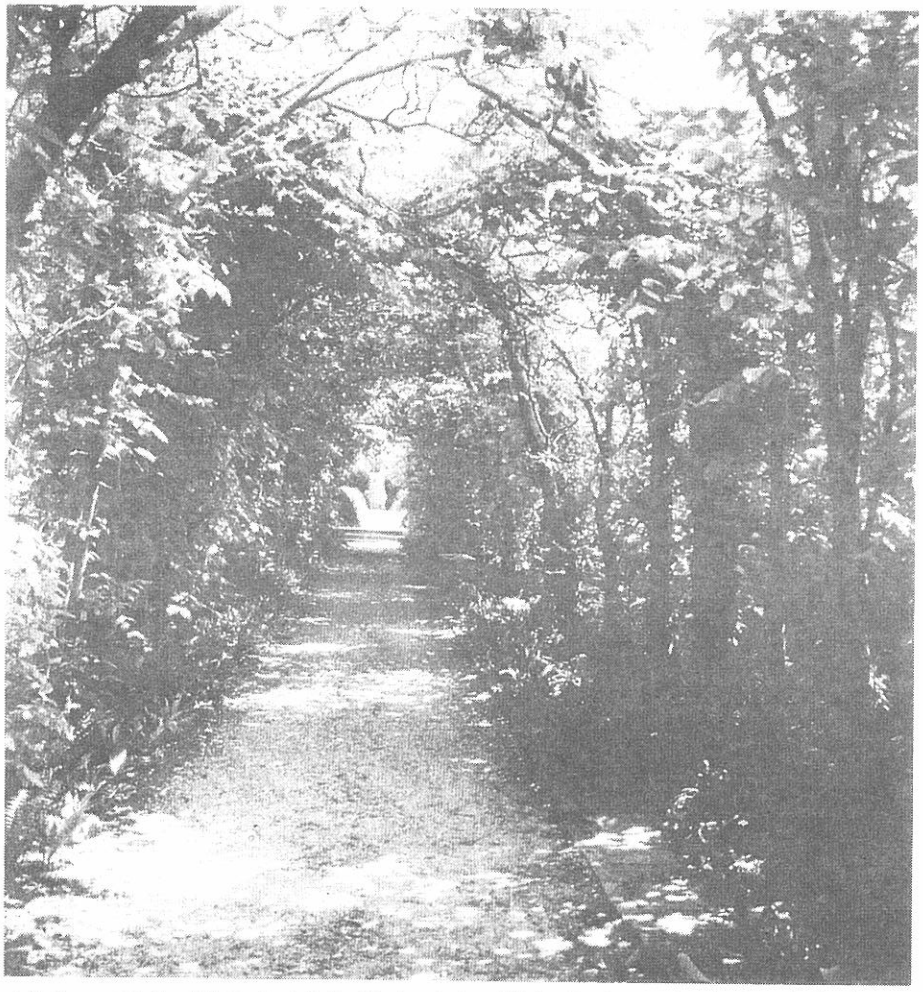
ひとたび骨格を形成する大枝が伸長したら、毎冬主幹から60㌢から1.5㍍の位置に枝を詰めること。またこん棒状の大枝から伸長しているいかなる枝も取り除くこと。最終的な樹木の大きさは、こん棒状の大枝ができるだけ間隔を保ち、長くなるよう最もよく見える状態とする。主幹がまっすぐ上に伸び続けないように注意する。あまり太くなったり、目的の大きさ以上に生長する前に一番高い骨格を形成する大枝の所で幹を止める。

ひとたび幹と骨格を形成する大枝が所定の位置に保たれたら、ポラード仕立て樹木は毎冬ないし少なくとも２～３年毎に剪定を必要とする。剪定は簡単で、全ての若い枝を1.3㌢ないし前年に生長し始めたところまで刈り込む。繰り返しその位置まで枝を刈り込むことは、幹の頂部ないし骨格を形成する大枝の先端にコブを形成することになる。

そうなった場所には、コブ状の株ないしコブ状の株を短い骨格を形成する大枝の先端に帽子をかぶったような高い頭部ができる。休眠期の早い時期に剪定すること、そうすれば落葉期に珍しい姿のポラード仕立て樹木を楽しむことができる。



2）プリーチング仕立て（PLEACHING）



プリーチ仕立てのブナは人をいざなうトンネルを形成する
（バージニア州、ウィリアムズバーグ）

「pleach」という言葉は、古い北部フランスの「plechier：編む」という意味の言葉から来ていて、樹木を組み合わせて生垣を作る時に、実際にこのように行う。普通の感じに枝と枝を一緒に編む。プリーチ仕立ての樹木の列は、薄くて水平な緑の壁の２次元植栽といえる。散策路の両側に樹木を列植し、各々の壁の先端から伸びる枝が道の真ん中を覆うように仕立て、緑陰のトンネルを形成する。例えばその樹木がリンゴの木であったら、果樹を摘み取ることができる。あるいはその場所を囲い込むように樹木を植栽し、屋根の高さまで幹の枝をはらうと、この生きているサマーハウスを覆う緑の屋根を仕立てることができる。

プリーチ仕立て樹木の選定は慎重に行う。プリーチ仕立てに向く種は、丈夫でしかも柔軟な枝を持っていることである。リンゴ（Malus sylvestris）、ブナ類、シデ類、シナノキ類、セイヨウナシ類、アメリカスズカケなどは良い選択といえる。列状や部屋を形づくるプリーチ仕立てのすべての樹木は、同じ種であるばかりでなく、同じ品種であり大きさも似かよっていること、そうすると生長もそろ

ってくる。列植の間隔はどの位の大きさに樹木を生長させるかによるが、最小でも90㌢、最大でも3㍍程度の範囲とする。列は東西に作るよりも南北方向とする方がどちらの側もより均等に日光を受けることができる。

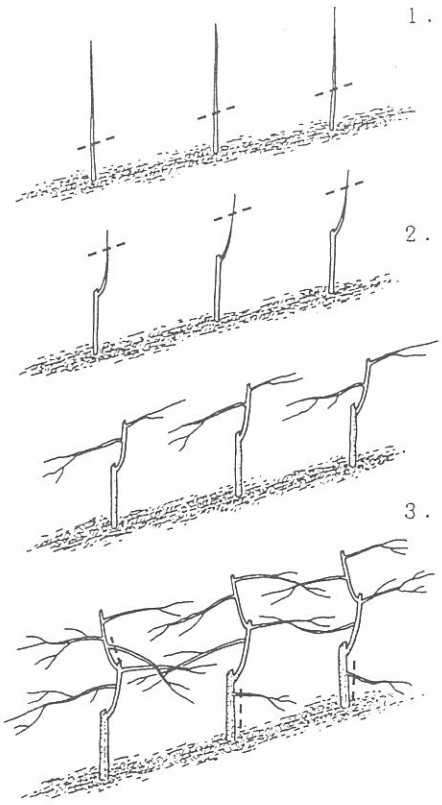
プリーチ仕立ての並木や木陰はやがて自立するものではあるが、望みの形に生長を促すためには多少の枠組みを必要とする。このために鉄製や木製の柱、および横木ないし水平にワイヤーや竹を張った柱を樹木の間に設置する。

植栽した若木を仕立てるねらいは、上方伸長と横張りへの生長を強制することにある。単幹にして旺盛な再生を刺激するために、植栽後ただちに切り戻す。各樹木に１本の大枝が上方へ向かうように促す。しかし枝張を促進するために頭部刈り込みによる生長抑制を定期的に行う。そして樹木を１つの平面のように水平に仕立てる。生長に応じて、主枝と側枝を支柱に結束する。たとえ地際から最初の枝まではっきりした主幹の長さがほしいと思っても、若木に生ずる若干の一時的な下枝は主幹を太らせるために、伸ばしておく。一時的な枝はおよそ30㌢の長さより伸ばさないように摘み取り、２～３年間後に切り落とす。プリーチ仕立て樹木の平面上に直立した枝は、完全に切り戻す。隣の樹木から枝が相互に届くようになったら、自然な感じに枝を編み合わせる。一時的に枝と枝を結束してもよい。一時的にというのは、もし腐ったりほどけたりしない場合、結び目はやがて枝を窒息させるものとなる。

ひとたびプリーチ仕立て樹木が割り当てられた範囲を埋めつくしたならば、毎年上から下まで剪定を必要とする（プリーチ仕立て樹木の列植を計画する時は、「上の」部分に気を付けること、定例的な剪定の際にその部分に手が届かなければならない）。地際に生える旺盛な上に伸びる枝や周りの枝は取り除く。混み過ぎている所は薄くする。この透かしは列植に（もし望むならば）軽快な見ためを与え、枯損枝や下枝の枯れ上がりを避けるために日光の通過を促す。とりわけ平らな面に直立するものなど手に負えない枝は切り戻す。

やがて支柱枠を取り去ることができる。プリーチ仕立て樹木の植栽は、編み込んだ枝が自然に接合することから樹齢とともによりたくましく生長する。

プリーチ仕立ての各段階

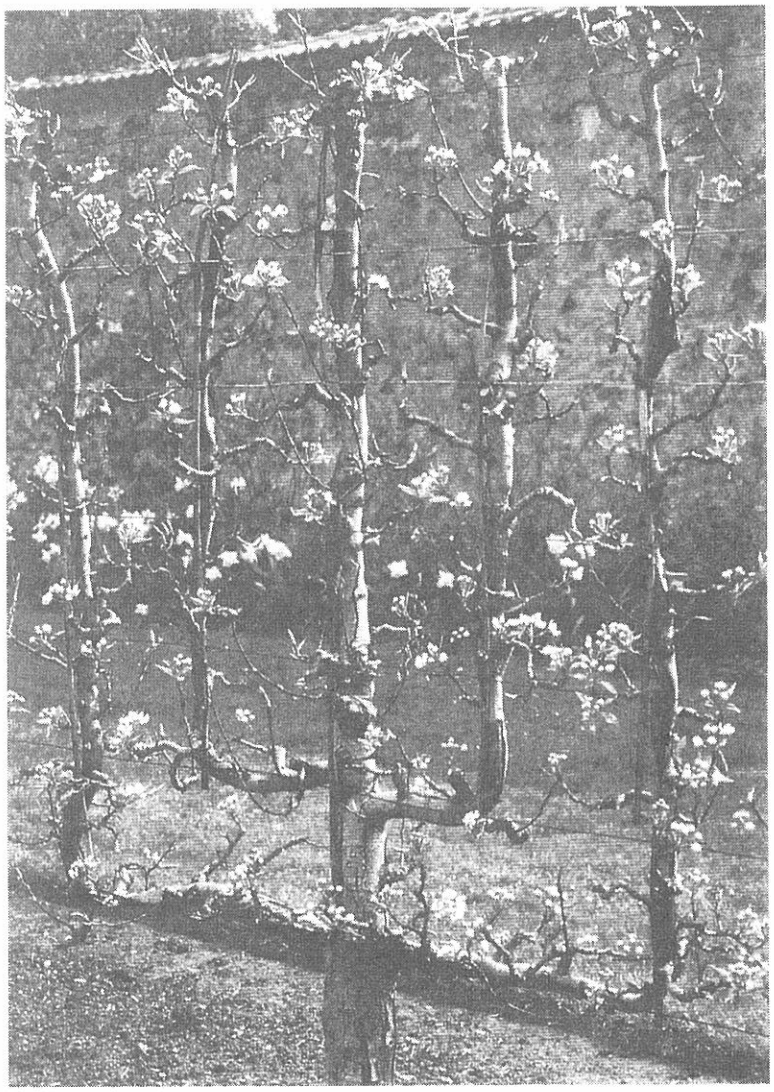


1．単幹にして再生を刺激するため切り戻す

2．若干の側枝の生長を促進するため、定期的に主幹のしんを摘む、そして水平に仕立てる

3．枝の生長に応じて、それらを編み込んだり、結束する。プリーチ仕立て樹木の平面に直立して生育する枝は切り取る。

3）エスパリエ仕立て（ESPALIER）



良好に生育したエスパリエは食物と美しさを提供する

エスパリエ仕立て（es-pal-YaY）は植物の仕立て方で、通常は果樹を規則的に２次元の形に整えることをいう。この言葉は古いフランス語のつっかい棒を意味するaspauから来ており、事実大部分のエスパリエは、支柱やワイヤーによって支えられている。エスパリエは16世紀のヨーロッパに正式な起源を持ち、果樹が細長い土地と壁に近く格別に暖かいという利点を活かして壁面に仕立てられた。厳密に言うと、広い土地でトレリスの上に生育するエスパリエは、espalier-aereのcontre-espalierという用語が使われる。最も用語にこだわる必要はない。エスパリエの定義は植物が幾何学的であること、といった程度にゆるやかである。イギリス人は特別な２次元の形に対して用語を使用しており、幾分風変わりな、依然としてかなり規則的で、ガーデナーによって「エスパリエ」と呼ばれる形状は、事実３次元のものである。

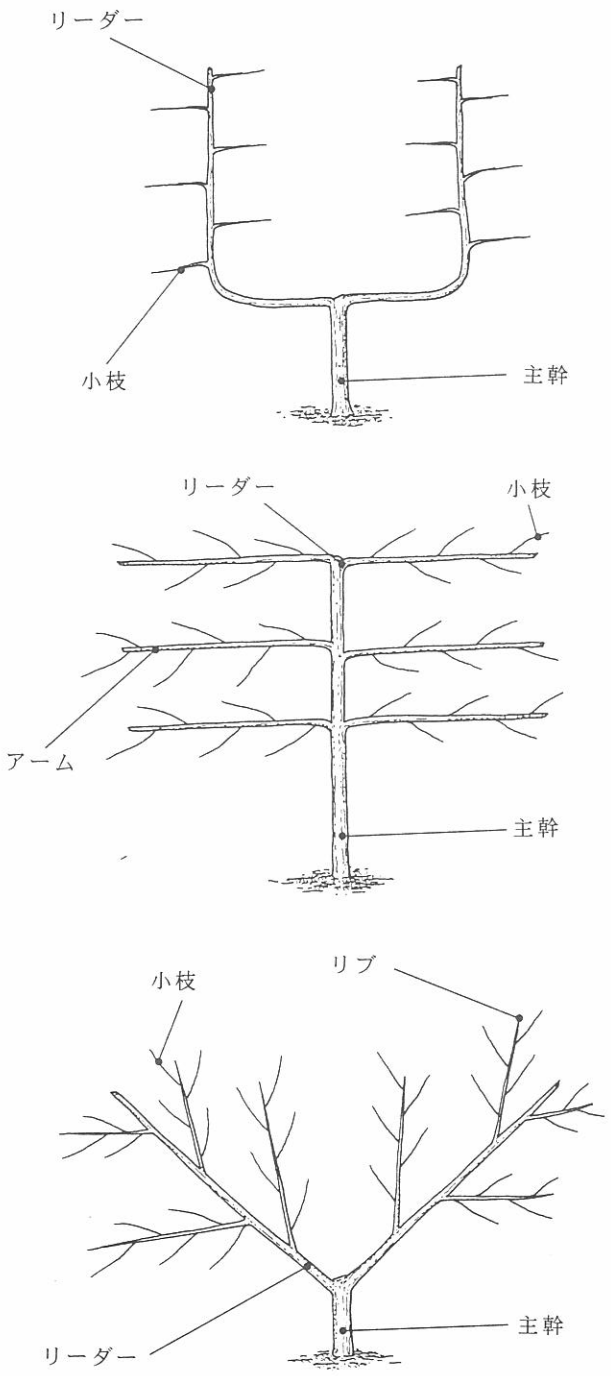
何故トレリスを直立に作り、それから形状を維持するために頻繁に植物を摘み取ったり切ったりしなければならないかという問題に行き当たるのか？それとい

うのは十分に生長したエスパリエは芸術と科学の幸福な出会いを表現するものであり、目ばかりでなく味覚を楽しませる植物でもある。次のようなことによりこの科学に対して芸術的に（あるいは芸術に対し科学的に）対処する、すなわち、生長をゆるやかにするため生い茂った枝を下方へ牽引する、葉を付けない恐れのある枝に切り目を入れる、夏に生長を整え実付きを保持するため枝を剪定することによる。

その結果良好に生長しているエスパリエの枝は、枝の長さ一杯に実を備え、豊富な日光と通風を浴びてこれらの果実はおいしく、大きく、色合いも鮮やかとなる。

エスパリエには絶えず、注意が求められるにもかかわらず、その世話は実際に大変な作業ではない。剪定し、透かし、土地に面的に植え背の高さで収穫できるように、樹木を決して大きく生長させない。一方で剪定は頻繁に行わなければならず、切り詰めは小さくかつこまめに行う、多くの場合親指のつめを使う以外何も必要としない。

エスパリエの各部分



エスパリエは植物が食用果実をならせることを制限をする必要はない。純粋に観賞用のエスパリエは幾何学的に据え付けた形を保持している（食用果実エスパリエでもある）。純粋に観賞用エスパリエのメンテナンスは、とくに、花や観賞用果実を付けない時に、気まぐれな枝の刈り込みを繰り返すこと以外何も必要と

しない。果実とくに食用果実を目的とする時、枝を切り戻す前に植物の反応を注意深く考慮しなければならない。果実を普通に養うだけの十分な葉があるか？切り取った枝に代わってたちの悪い新しい枝が出てこないか？その剪定が生長を抑制し、残した枝の長さの範囲に花芽が備えられるようにしたか？

□エスパリエのフォーム

エスパリエは主幹から生長するリーダー（leaders）とよばれる１本以上の枝から構成されている。アーム（arms）ないしリブ（libs）と呼ばれる残す枝は、リーダーから立ち上がる。アームは通常水平かそれに近くなる。リブはあとで言及する通常扇形タイプのエスパリエのリーダーに生育するヘリンボンの枝に属する。小枝（branch）と呼ばれる一時的な枝は直接リーダーから生長するか、もしあればアームないしリブから伸びる。エスパリエの生長するトリックは、小枝を最小にし果実を最大にすることである。

エスパリエの最も簡単な形は、シングル・リーダーと言われるものである（人によってはエスパリエよりもコルドン＝cordon：果樹の幹または枝を１～２本に限って縦、水平または斜め方向に仕立てる、の呼称をとる）。垂直のコルドンは45㌢ほどの列の間隔に作ることができ、例えば、小さなスペースで生長する多くのリンゴの変種が向いている。あるいはコルドンは散策路のボーダーないし庭園の縁に水平に仕立てることができる。

コルドンはスパー（spurs：年間に2.5㌢程度しか伸びないずんぐりした花芽の付いている小枝）と呼ばれる小枝を持つ生長量の少ない果実のなる植物に最も適する、それ故、コルドンはヤマアラシというよりも飾りひもの形のようである。リンゴやセイヨウナシのような一般的な果実やまれにプラムの中には、コルドン仕立てに向くものがある。垂直なリーダーの頂芽優勢により、頭でっかちに生長する傾向を阻止するために、一般に１本のコルドンが植えられ、垂直よりもむしろ斜めに生育される。このやり方は均一な芽出しとコルドンの上方や下方への伸長を助長する。

地面に近いところで垂直なコルドンの単幹を終わらせ、２本の幹に開き、ふたたび垂直に生長させる前にお互いに距離を空けＵ字型のパルメット（ヤシの葉状の模様）にする（図１）。２本のＵ字型の垂直なリーダーをふたたび開き、２重のＵ字型パルメットを持たせることにより、１本の植物から広がりと収穫を増し、もちろんデザインも変化させる（図２）。

このテーマにどれだけのバリエーションが存在するか想像してみてほしい。中央の幹は２本の側生枝を外側へ生長させ、そこから上に立ち上げリーダーの中の広いＵ字型を形作る。次にもう１つの２本の側生枝を外側に生長させ、上に立ち上げもう少し狭いＵ字型を作る。このようにすると枝状の燭台ファッションが出来上がる（図３）。あるいは、中央の幹が植物の最上部まで生育し、それに沿って左右に水平なアームの段々を送り出す（図４）。（この後者の形はイギリス人がエスパリエという呼称を採用しているもので、他の人は水平パルメットと呼ん

だり、あるいは、もし横のアームの角度が上へ向かっていれば斜上パルメットと呼ばれる、図５）。あるいは、中央の幹が２本のリーダーの各々から２方向に外側に生長するアームが伸びた水平な広いＵ字型に開いたものもある（図６）。

エスパリエのいろいろな形

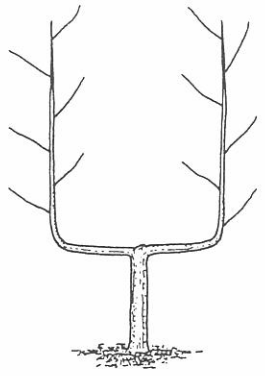


図１　Ｕ字型パルメット

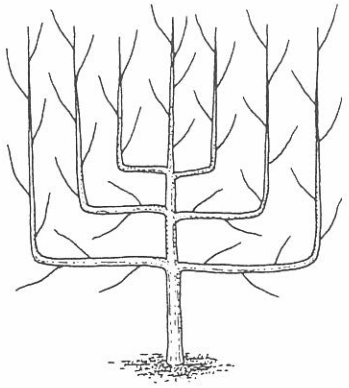


図３　枝状の燭台

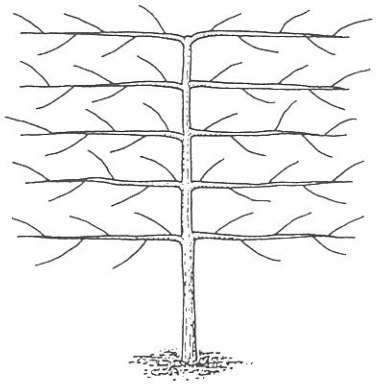


図４　水平パルメット

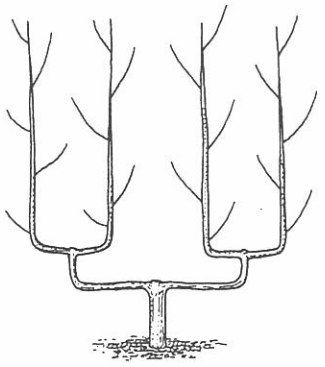


図２　２重Ｕ字型パルメット

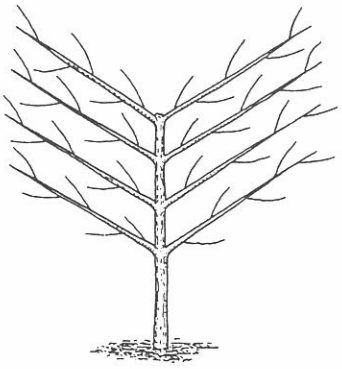


図５　斜上パルメット

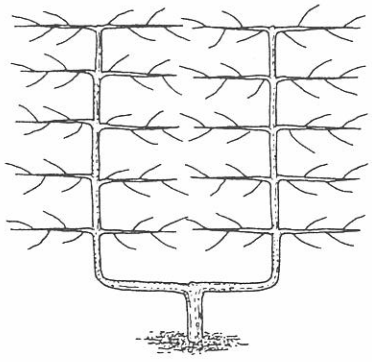


図６　水平パルメットを持つ広Ｕ字型

これらすべての形は共通の問題を抱えている。つまり真っすぐなリーダーの先端近くで伸び過ぎることである。これは頂芽優勢となる結果であり、最上部の芽と当年枝が最も強健に生育する。（オーキシンと呼ばれる植物生長ホルモンが最上部で生育する頂端や芽で生成され、幹のずっと下の生長や芽出しを抑制する）。M.Gressent（Arboriculture　Fruitiere, 1869）の言葉を引用すると、垂直な生長は「樹木の全体的な経済性に問題を投げかけ、生産を麻痺させ、まさしく存在する水平な枝と相互に妥協して解決をはかるものである。」

その他のエスパリエの形は垂直なリーダーの持つ潜在的な危険を克服するために開発されたものである。１つのポピュラーな形は「扇形」であり、中央の幹は低く抑えられ、２本のリーダーは外側に広角で分かれる。上下にリブを伸ばしたこれらのリーダーは各々上で詰め、それから伸びたスパーないし一時的な枝を持

つ（図７）。リブの本数やどの程度垂直に伸ばしてもよいかは、植物の本来の活力に依存する。より低くかつ、扇形の外側の部分をまず形作るためには、一番高くかつ中心に位置している潜在的に最も活力ある部分を保持して、残りの部分の生長を追いつかせる。その他のデザインには、上方に真っすぐ生長させるよりもむしろ、装飾的な曲線で丸く曲げることにより、中央のリーダーを故意に弱めるものもある（図８）。

それから一列に並んだり、列状に重なった植物から構成されるエスパリエがある。そのようなデザインの最もポピュラーなものの中に、ベルギーのフェンスという生きた幹の格子作りがある。いくつかのデザインでは、エスパリエが最終的に自立できるように隣の幹と一緒に接ぎ木するものがある。

図７　扇形エスパリエ

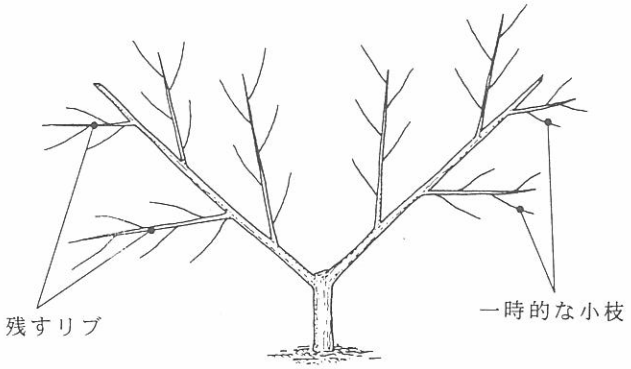
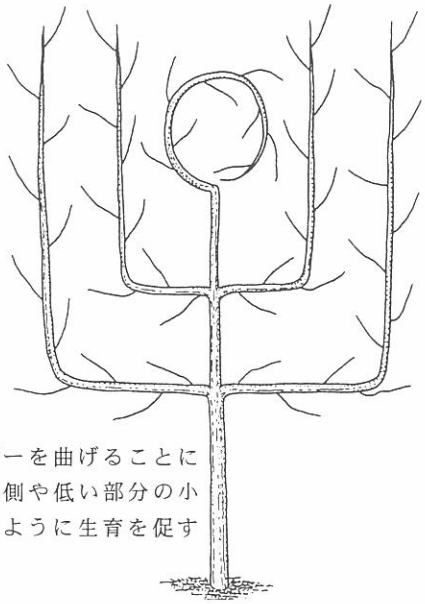
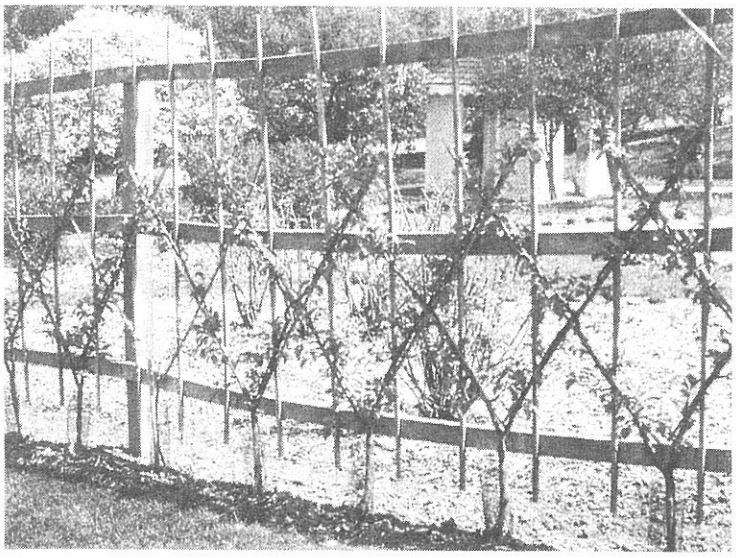


図８　頂芽優勢を処理するもう１つの方法





ベルギーのフェンスとして仕立てられたこのリンゴは成木となった時、香りが良い果実を生み出す装飾的なフェンスとなる。

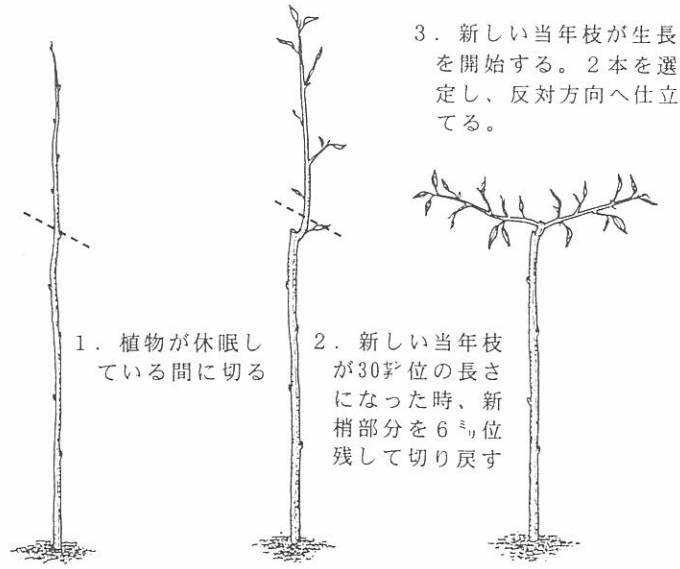
□仕立て

エスパリエに仕立てることは他のどんな植物の仕立てともだいたい同じようである。分枝させたい所で若木のしんを止め、望ましくない枝を生長させないように透かす（エスパリエの平面上に直立して伸びた幹を含め）。伝統的な果樹の仕立てとエスパリエの相違は、ゴール設定にある。エスパリエについては、幹をほぼ完全な左右対称に展開させ、枝の長さ全体に生き生きした芽を備えさせる。たとえデザインがどうであれ、リーダーとリーダーの間に十分な間隔（約30㌢）を取る。展開するリーダーの生長する方向を変えるために曲げたいと思う所で、曲げながら幹をわずかにより合わせても破損しないよう練習する。リーダーをＹ字型あるいはＵ字型に分けたい所で、できるだけ近く反対側に、そしてリーダーに沿ってお互い接近して伸びている横のアームを選択する。植物がすでにふさわしい位置に数本の幹を有していることもあるし、望みの場所のちょうど上でしんを詰めることもできる。何故ならば対生葉よりも互生葉の植物の側生枝はどの幹にも適当な間隔で生じ、そのような植物に見られる休眠している当年枝を刈り込むことによって生ずるアームは、決して正確にお互い反対側には発生しない。

とはいえエスパリエ鑑定家はとかく完璧な対称を望むものであり（互生葉の植物においてさえも）、そのために双方から直接にアームを交差させる２つの方法がある。１つの方法は単に反対側にある当年枝にもう一方の当年枝を接ぎ木するか、芽を反対側にある芽に接ぐことによって、望みの所にアームを伸ばす。もう１つの方法は植物が休眠している間に分割させたいと思う所で幹を切り詰める。切り詰めた幹の先端から垂直に活力のある当年枝が生長し、その当年枝の基部には密生した輪生体（茎の節に葉が輪状についていること）が形成される。垂直な当年枝が約30㌢の長さになった時に、輪生体の所まで切り戻す（約6㍉程度新しく伸びた部分を残す）、その輪生体の中にある芽から生じるほぼ正確に同じレベルにある当年枝を２本確保すべきである。美学論は別にして、同じレベルで生ずる当年枝は、生長する際により足並みをそろえる。

植物が休眠している間、毎年エスパリエのリーダーを短くする。リーダーが一杯の長さに達するまで、前のシーズンに生長した部分の1/4から1/2の範囲で切り

完全な対称に導くための２本の頭部形成



戻す、弱い当年枝にはそれに応じた切り詰めとする。この年に１度の切り詰めの目的は、幹に沿って萌芽を活発にすることにある。一杯の長さに達したら、リーダーは各年前のシーズンの生長分を2.5㌢程度切り戻す。

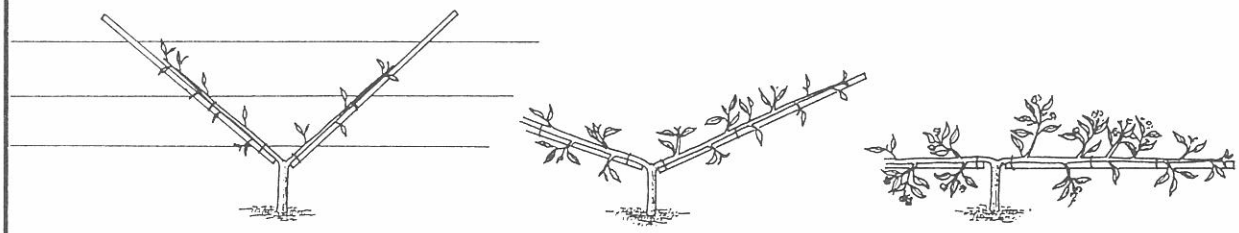
親指の爪を自在に使って生長した当年枝の先端をピンチすることにより、エスパリエを仕立てることができる。外に向かって伸びようとする当年枝は、先端をピンチして対称を維持する。30㌢位毎に伸びたリーダーの先端をピンチ（もはや先端のみ）することは、当年枝の低い所にある芽を活性化する。

エスパリエを支え、リーダーがさく杖のように真っすぐ望みの角度になるようにするためには、まず一般に木材、ワイヤー、ないし鉄のフレームを直立させる必要がある。（すべてを厳密に行うことは、美学論ということでなく植物生理学の問題である）。ひとたびフレームを立てたら、当年枝を目的の方向に導くために竹の節に結束し、さらにその節をフレームに結束する。

フレームに直接ではなく節にリーダーを結束することには２つの理由がある。第１に、たとえトレリスが最も容易に水平にも垂直にも建設できるとしても、ワイヤーは最も容易に柱と柱の間に水平に張ることができ、リーダーに取り付ける

水平リーダーを発達させる２つの方法

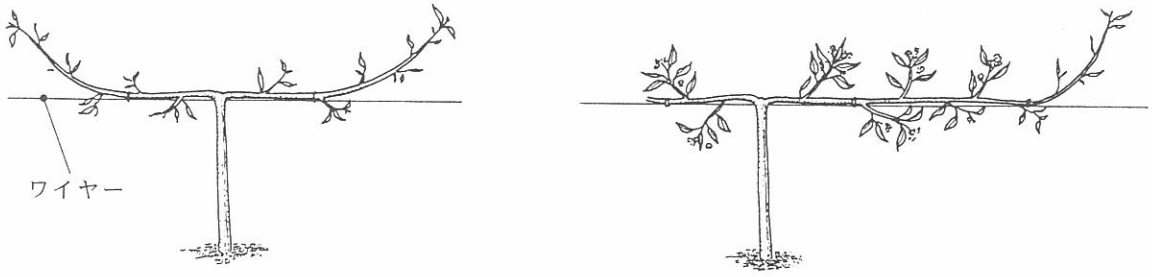
リーダーを竹の茎に結束し、次第に下げていく



リーダーをまっすぐに保つため茎に結束する。リーダーが若く旺盛な生長を保持している時、茎を上向きの角度にする。

リーダーが成熟するにつれて、生長を緩やかにするため茎を低くして、最終的な水平の位置にリーダーを導く。

終端を自由にしておく



リーダーの木質化した部分を下に結束したまま、一時的に上向くように終端を自由にしておく。

竹の節はどんな好みの角度にも固定できる。第２に、トレリスに直接でなく節に当年枝を結束することは、たとえ生長に応じてそれを上げたり下げたりしなければならないとしても、幹を真っすぐに保つことができる。これで頂芽優勢になることを助けることができる。

例えば、一般にエスパリエが２本の水平なアームを持っている場合、これらのアームを生長の動きに合わせてまず上向きの角度に仕立てようとするであろう。上に向かって支持すればするほど、生長は早くなる。アームが一杯の長さに達したら、暫時生長をゆるやかにするため水平に下げる。これにより、節からほどく必要が出てきて、それから枝をしっかりとそれに縛り、目的とする角度に再結束する。

もう１つの方法は、すべての当年枝のしかも終端を水平な支柱に縛ることにより、生長を活発に保ちながら、水平のアームを確立するために頂芽優勢を利用することもできる。当年枝の終端を結んでおかないと、それらは自然に上向きとなり、そして、上方志向が先端の旺盛な生育を保持することになる。当年枝は伸びて細長くなるけれども、古くなった部分を水平な支柱の下の方へ結束したままにしておく。

植物は決して規則通りには従わず、怠慢な芽や当年枝は特別な処置を要する。ナイフを使って覚醒させる必要のある芽の上側の枝（写真）、あるいは抑制する必要のある当年枝の真下に切り目を付ける。枝の間延びしている部分を満たす直接の方法は、必要とする場所に芽や果芽を接ぐことである。生育を促進させたくない強い水平な当年枝を処理するには、完全に切り払うか、やがて果芽に変わることもある２～３芽を残して短くするかどちらかによる。

しかしこの後者の剪定は、エスパリエ剪定の次の局面の中核となる特殊な剪定方法といえる。

芽の上の樹皮に切れ目を入れることにより、当年枝を形成する芽が側生枝に変わることがある、しかもまさに必要とする部分に。